

## 日本語上級クラスの「読み」指導

浮田 三郎

### 1. はじめに

日本語教育の教材及びカリキュラム作成に当たっては、一般に「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を、いかに柱にするか、いかに振り分けるか、いろいろな観点から考慮されている。最近の日本語教育の諸教材を見てみると、初級レベルの教材に関しては、テキストも比較的考慮されたものも見られるが、中級、上級レベルに関する教材に関しては、与えられる授業時間数などを考慮した十分なものは少ない。しかし、それは、日本語の能力が中級、上級レベルになるほど教材あるいは教授法の多様性が必要になるからであり、それは、また、教育の現場で与えられ得る授業時間にも大いに関係している。

日本では、四技能の中では、「読む」の技能の教育が一番よく行われているかのようであるが、駒井、1990によれば、「日本語教育に限らず、外国語教育一般について言えることであるが、この四分の一世紀に「話す教育」は随分と進歩したのに、「読む教育」は殆ど進歩しなかったばかりか、全く無視されて来たのではないかと思う。」とあり、真の「読む教育」が行われているとは言い難いようである。しかし、「読む準備訓練」は行われていると言ってよいようである。また、上級レベルの「読む教材」に関しては、生のテキストも考慮に入れれば、比較的豊富であると言えるのではなからうか。

確かに、英語教育におけるのと同様、日本語教育においても、「読む」「書く」の教材・教授法の開発に比べると、「聞く」と「話す」の技能教育の教材・教授法の開発は、OA機器の開発とも相まって、L.L.教材やビデオ教材など随分と進んだようであるが、体系的な教材化、教授法の開発はまだ十分とは言えず、多くの教育現場での教室作業でも十分なことができていないのが実状であろう。ただし、これも、現実の教室に於ける多様な留学生の状態を考えれば、仕方ないことであろう。と言うことは、御座なりにされてきた「読む」の技能教育に関しては、なおさら考慮されなければならない点があるということである。

そこで、本稿では、特に日本語の上級レベルの「読む」の技能の教育に焦点を当て、教育現場における事例も参考にして、日本における国語教育や外国語教育と

も比較して、具体的にどんな点が問題になっているのか、また、それをどのように改善していけば良いかなどと検討を加え、考察を試みる。

## 2. 日本語上級の授業の現状

以前にも述べたように、日本語上級レベルの授業には、色々な形態が考えられるが、現在広島大学に在籍している留学生達の中には、限られた授業の形態、教材及び授業法に関し不平を述べる者も多い。

上でも述べたように、留学生たちの研究目的や日本語学習の動機の違いや日本語能力の差などと非常に多様であり、したがって、彼らの不満も、非常に多様である。日本語教育の現場では、折りに触れ、彼らの意見を聞くことが多い。こうした留学生達の授業に対する意見から、日本語教育の現状を見てもみることできる。彼らの意見は、例えば、

- (1) 「書く」技能を伸ばすための体系的な授業をして欲しい。
- (2) 作文を書かせて、訂正して欲しい。
- (3) 学位論文が書けるようになるように「書く」技能の指導をして欲しい。
- (4) 視聴覚機器を利用した「聞く」の技能の向上を目指した授業をして欲しい。
- (5) ディクテーションのテストをして欲しい。
- (6) もっと会話の練習をして「話す」技能を伸ばしたい。
- (7) ディスカッション（ディベート）などの場が欲しい。
- (8) 日本の会社に入っても困らないような敬語表現を身につけたい。
- (9) アナウンサーのような流暢な日本語が話せるようになるような授業をして欲しい。（アクセント、イントネーションに留意）
- (10) 色々な文章を読みたい。（cf. 多読）
- (11) 流暢に読めるようになりたい。（句読点、アクセント、イントネーションに留意）
- (12) 色々な文章を読んで、日本文化、日本人の考え方などについて討論したい。
- (13) 文学的なものを読んで、内容について討論する。
- (14) 諺のような民衆文学的なものを読みたい。
- (15) 方言、俗語などの表現も勉強したい。（アクセント、イントネーションに留意）
- (16) 文法的なこと（例えば、「は」と「が」、「に」と「で」、あるいは「・・・から」、「・・・ば」等の使い方、助詞や助動詞の用法と意味等）を学習したい。
- (17) たくさん宿題を出して欲しい。

等であるが、一つのクラスに多種多様な留学生がいる現状では、さらに逆に、上記

の意見に対して、例えば、

- (18) 上記の(2)(3)のような意見には全く反対で、そこまで厳しくしなくてもよい。
- (19) 聴覚機器（レシーバー）を使用するのは嫌いだ。（少数）
- (20) テストはしなくてもよい。（テストをすると、出席者が激減する。）
- (21) アナウンサーのような流暢な日本語は今の目標ではない。
- (22) 方言、俗語などは勉強しなくてもよい。
- (23) 色々な文章より自分の専門の論文を読む訓練がしたい。
- (24) ディスカッション（ディベート）などは、しなくてよい。（喋るものが偏る傾向がある。）
- (25) 宿題は出さなくてよい。

等と、反対の意見を述べる者もいるのである。もちろん、不満、意見は、まだまだある。例えば、

- (26) 自分の国では、先生やクラスはもっと厳しかった。
- (27) もっと体系的なカリキュラムを組んで欲しい。
- (28) 先生と先生、クラスとクラスの連絡ができていない。
- (29) 授業の内容に体系性がない。
- (30) 自国の方が時間数が多かった。（授業時間数をもっと増して欲しい。）

等と、カリキュラムや授業に関する制度に対する基本的な意見も見られる。大ざっぱにみても、このように、留学生達の日本語教育の授業に対する意見は多種様々であり、これらを限られた授業時間と限られた教官スタッフでまとめることは易しいことではない。

### 3. 「読む」の技能教育

今、留学生達の意見を利用して、上級の日本語教育の現状の問題点を大まかにかいまみた。さて、これらの意見の中で、(10)–(14)、(21)–(23)は、特に「読む」の技能の教育に関係しているが、その他にも、筆者が現場で体験したいいくつかの事例を基に、「読む」の技能教育に関する意見を挙げ、その方法について考えてみよう。

- (10) 色々な文章を読みたい。

多くの色々な文章を与える（多読）。能力に応じた教材を考えれば、多種多様になり、教室で全て行うことは難しい。宿題の形を取り、独自の練習が不可欠である。

- (11) 流暢に読めるようになりたい。

教室作業でも、音読練習が必要である。教室で朗読させて、音読練習をする。

的を得た矯正が必要である（学生のプライドを傷つけないためにも）。

十分な予習（と復習）が必要である。

人前で音読するのが嫌いな者もいる。日本語（語学）が嫌いになる可能性がある  
るので、考慮が必要であるが、練習しないと上手にはなれない。

「音読と読解は違う。音読が理解を妨げる。」と言う意見もあるが、内容を理解  
した音読練習を心がける。

(12) 色々な文章を読んで、日本文化、日本人の考え方などについて討論したい。

(13) 文学的なものを読んで、内容について討論する。

(12)(13)のような場合は、内容的にやや高度な授業形態になり、現状ではこのよう  
な授業を満足に進めることは難しい。

(14) 諺のような民衆文学的なものを読む。

日本文化、日本の自然、民衆の考え方などがよく分かる。

代表的なもの、外国と対照的なものあるいは類似のものを選ぶ。

(15) 方言、俗語などの表現も勉強したい。

(11)とも関連して、色々な豊かな日本語表現の理解につながるかどうかである。

映画やドラマを見て、十分理解しようと思うと、方言などの学習も必要であろ  
う。

(21) アナウンサーのような流暢な日本語は今の目標ではない。

(22) 方言、俗語などは勉強しなくてもよい。

(11)あるいは(15)とは、反対の意見であるが、それぞれ研究に忙しい研究生にして  
みれば、時間の使い方にずれがでてくるのはもっとものことである。

(23) 色々な文章より自分の専門の論文を読む訓練がしたい。

英国の大学では成果が上がっているようであるが、それぞれにある程度まと  
まった専門の学生を集めなければならないし、それに対応できる教師の資源と  
数が必要である。

以上のような学生の要望に全て応えることはできないにしても、「読む」教育や教  
材の提供は重要なことである。

#### 4. 「読む」教材

日本語の能力を向上させるためには、やはり良い文章にできるだけ多く触れる機  
会を持つことが重要であろう。それには、よい文章を読むという方法が、一番よく  
取られており、実際それは有効な方法である。とは言っても、論説のような肩の凝  
るようなものばかり読む訳にもいくまいし、軽い通俗小説ばかり読む訳にもいくま

い。ある程度興味を繋つつ、講読を進めていかなければならない。

### 1) 「読む」技能教材の下位分類

「読む」技能の練習をするに当たって、「読む」技能練習の材料や教材を選ばなければならない。そこで、大ざっぱではあるが、「読む」技能の教材の下位分類をしてみると、

小説：文学的小説，通俗小説，コメディ，戯曲，シナリオ等

論説：社説，論文（各分野），小論

報告書：学術的なもの，会社などの報告書

案内書：観光案内，会社の案内

漫画のようなもの

などのように、いくつかの文章のスタイルに下位分類して、カリキュラムや授業内容を考えてみる必要がある。

次に、例えば、現場でのいくつかの例を具体的に考えて見てみよう。

### 2) 短編小説を利用した場合

短編小説は、日本における英語教育を含む外国語教育の中でも、読解教材に（副教材としても）よく利用されることは同じであろう。もちろん、国語教育においても、同様である。例えば、筆者が利用した短編作品を分析してみよう。

#### (1) 「張り込み」、松本清張

文章は、比較的平易であり、文学的表現もかいまみられる。

日本の自然、風土の描写、日本の文化、習慣、風習等の記述や表現が豊かであり、身近なことに關しても質問を受けたり解説したりすることもできる。また、文学と通俗小説の違い、あるいは「文学とは何」をテーマに討論する。

その他、松本清張の作品では、

#### (2) 「一年半待って」

#### (3) 「地方紙を買う女」

#### (4) 「声」（教室作業にはやや長い。後半は推理小説としての形を整えている。）

等も同様に、利用しやすい。その他にも、

#### (5) 「十一月三日の午後の事」、志賀直哉

教室の講読の中で、精神的な、内容的な議論が多くなる。

日常生活と人間の心理の微妙な動きが描写されている。

平和と戦争の課題の提示、また、戦争が迫り来る予感と、その中で動めく人間の微妙な心理描写の表現を味わうことができる。

#### (6) 「若い娘」、石原洋次郎

(5)とは対照的に明るい雰囲気である。

日常生活の中に見られる人間の考え方が軽妙に描写されている。

日本女性のものの考え方、一般的な日本人の女性に対する考え方などが表現されており、女性のあり方についても討論することができる。

等のような短編も利用できる。さらに、(1)–(4)等と(5)と(6)とは異なった内容の討論ができる。

### 3) 長編小説を利用した場合

長編小説を授業で利用するには、いくつかの問題点がある。

(1) 教師側にも学生側にも十分な準備が必要である。さもないければ、教室作業では作品を完全に読破できない。

(2) 学生達に授業に対する興味を失わせない。内容及び表現に対する興味を持続させる。教師側に十分な工夫が必要である。

(3) 「教室作業で読む必要はない。自分で独力で読める。」という意見もある。

例えば、「点と線」、松本清張の場合

文学と通俗小説との対比もできるし、社会機構と権力批判（文学的な構成）を見ることもできる。

社会派推理小説、学生には人気がある。内容的には興味が持続する。

### 4) 解説・評論文を利用した場合

例えば、100分間の授業で、「音読」「読解」練習をし、質疑応答をするのに適当なものが多い。

新聞の切抜きなどのコピーを利用して、「社説」、「天風録」、「天声人語」、「読者の意見」、「文学時評」等を一回完結で、講読を進める。

以上のように、どれにも長所短所が考えられる。

また、授業時間の問題も考えなければならない。例えば、週2時間の時間配当は、十分ではない。例えば、100分間（週1回）×15回（一学期）では、短編の場合は3編前後を講読することができるが、長編の場合は、一編が終わらないこともある。本時の教室での講読速度は、大体5ページ位設定しておくが良い。

## 5. 「読み」技能教育の一般的留意点

### 1) 一般的な留意点

(1) 教室作業あるいは教材が、カリキュラムあるいは該当の授業に合っているか、利用できるか、留意しておく。

(2) 「読み方」の練習の比重をどうするか。

(3) 音読練習（朗読も含めて）の裏付け（cf. 4）。

- (4) 範読：学生の音読の前か後か。(前の場合：学生が予習していなくても、漢字などが読めるようになる。しかし、安易になる傾向があるので気を付けなければならない。後の場合：学生の実力及び予習の程度が分かる。十分な予習をするように指導しなければならない。)
- (5) 学習心理的に、斉読、音読を(好き嫌いを考慮して)どのように取り入れるか。
- (6) 教材の面から、内容的にも好き嫌いを考慮する。
- (7) 授業の教材の欠陥、不足をどうするか。(教材作成に当たっては、コピーを利用する場合、著作権の問題などがある。)
- (8) 復習作業をどうするか。例えば、次の課あるいは新教材とどう関連付けるか。その整理をどうするか。
- (9) 指導目標をどう定めるか。
- (10) 学習興味をいかに持続させるか。
- (11) 解釈・読解作業をどのように取り入れるか。(語句、文法、内容などに対する質問を受けたり、パラフレーズさせる。cf. 日本の外国語教育における訳読法)
- (12) 討論、ディスカッションをどのように取り入れるか。
- (13) 多読指導は、宿題に頼らなければならない。(例えば、「事件、事柄の記述」、「自然の描写の仕方」、「標準的な表現か、古くないか」、「方言か、男性あるいは女性の話し方か」、文化的背景を持つ表現、諺、比喩表現などにも留意させる。文学性についても考えさせる。)

## 2) 指導目標

### (1) 読解

1. テキストを読んで、「何かに」感銘させる。例えば、「生命の尊さ」、「真実の尊さ」等。
2. テキストの中で、一番重要なことは何か、また、それに対してどう思うか。例えば、「何が真実か」、「人間の中の矛盾」、「社会機構の矛盾」等に関してどのように読み、理解しているか。読後に討論する。
3. テキスト(特に、物語)の組立、筋の展開を理解させる。と同時に、その新鮮さ、面白さを理解させる。例えば、「事件の展開と共に変化する若者の心理の描写」、「事件の展開の中での自然の描写、社会構造の描写、社会構造の欠陥、社会悪、政治権力の悪い点などの記述」、さらに、その描写の仕方に目を向けさせる。
4. 表現の豊かさ(自然の描写、心理の描写、事柄の描写の仕方とその豊富さ)に目を向けさせる。また、自然な表現、あるいは比喩表現に気付かせる。

5. 日本文化の特徴，日本人の考え方，男性の考え方，女性の考え方，東洋の考え方，西洋の考え方，老人，中年，若者，青年の考え方，を指摘させたり，比較させたりする。
6. 文法的な面からも，例えば，指示代名詞の使い方等にも眼を向けさせる。
7. 内容に関する理解の仕方（例えば，指示代名詞や構文の面からどのように解釈するか。）
8. 日本文の省略の仕方。
9. 文体的な特徴に気付かせる。
10. 日本語と留学生の母語との文法体系の対照比較も試みさせる。

## (2) 音読

1. テキストが正確に発音して読めるようになる。
2. テキストがある程度流暢に読めるようになる。
3. 物語のリズム，イントネーション，他の文，会話の文を考え（理解し）て，感情も込めて，イントネーションにも留意した音読（朗読）ができるようになる。

## 3) 「読む」指導の要点と大切さ

### (1) 読解（読解練習の色々）

読解練習はそれぞれの目標に合わせて考えなければならない。

1. 授業の前に色々な課題を提示する。読解のヒントになる。
2. 重要な構文，難しい表現（日本的なもの，諺，比喩表現など）は，予め解説しておく。
3. 生のテキストを読む練習。

この1，2のような訓練も必要ではあるが，このレベルの学習者になると，生の小説を読んで，まず，学生が自主的に，問題点を見つけたり，重要な構文，難しい表現（日本的なもの，諺，比喩表現等），日本の文化，政治，日本精神的なもの等を解釈しようとする努力が必要である。学生が，自分で見つけた諸点に関して自分で調べてみて，問題になりそうな点やおもしろい点などを教室で発表する。その発表には，様々なものが含まれていて，留学生の多様性と日本語や日本文学や日本文化に対する彼らの実力や興味の持ち方が分かり，有益である。

しかし，このような教室では，実際，彼らの積極的な態度をいかに持続させるかが大きな問題となる。例えば，ある学生は，一回目二回目三回目と，語句の説明や問題点の説明等に，非常に活発な発言をするが，四回目には発言が不思議なほど止まり，静かになる。後で事情を尋ねてみると，「実は，予習をして来なかった」のだそうだ。このように，学習者が予習をしてきた時と，そうでない時では，教室作業

は極端に異なることがある。全員が予習をして来ることが最善であるが、少なくともクラスの構成員の半数の学生が予習をして来ていないと、教室作業も停滞気味になり、最初は意欲のあった学生も、段々と積極的な気持ちを失っていくことが多いので、充分気を付けなければならない。

もちろん、多くの学生にとって、テキスト中には難解なところが少ない。したがって、学生が、自分で調べてみて、それでも分からないところを教室で質問する。そうすれば、日本語や日本文化などを既に比較的良好に知っている学生か、上記のように自分で問題の解決をした学生が、それに対して発言し、説明をすることができるので、学生が主体的に参加し発言する授業形態が実現する。

もちろん、教室作業の中で、学生達が見落としている点は、教師の方で指摘してやり、説明をしたり、討論の進展を促したりしなければならない。

常に、授業の前に読解のヒントになるような色々な課題を提示することは、今も述べたように、必ずしもプラスになるとは限らない。重要な構文、難しい表現（日本的なもの、諺、比喩表現等）も、自分で見つけることが必要である。

## (2) 音読

私達は、「読書百回意自ずと通ず」などの諺で諭され、音読であるいは黙読で、文章を読む訓練をしてきた。「音読」の練習もするし「読解」の練習もしてきた。中学、高校時代を振り返ってみると、国語や英語の授業の中で、「音読」の上手な者は、総じて、国語や英語の成績は良かったようである。即ち、彼らは「読解」も良くできたのであり、語学の実力があつたと言うことになるのである。ただし、その逆は、必ずしも真ならず、と言うことも記しておかねばなるまい。即ち、「音読」は下手でも、「読解」は良くできる人がいたということである。あるいは、上でも見たように、「音読」が文章の理解を妨げているという意見もある。

しかし、ともかく、「音読」が良くできるということは、内容もよく理解して、練習をしているということであり、こういう努力が、実力になるのである。

大概、1987年では、ドイツの国語教育でも、「毎時間学習者に活発な授業参加を目指す。そのために、音読を課す」と言うようなことが述べられているが、音読も大切なことが分かる。

## (3) 指導の順序

### 1. 復習

教室で、前回の粗筋、内容を尋ねる。(多くの場合、正答できない。家で復習して来る者は、少ないのが実状である。)

### 2. 読みの練習 (範読と学生の音読、斉読はしない)

個人個人の発音、イントネーションの矯正ができる。学生のプライドも考え

て、適切な指導をしなければならない。

① 範読－個人読み－範読（－質疑応答）

② 個人読み－範読（－質疑応答）

### 3. 質疑応答

説明（質問が出た場合：なるべく教室のその他の学生に尋ね返して説明させる。明解に説明できるようにフォローしてやる。）

解釈，語句，構文，語法，指示代名詞の使い方などの解明。

内容，構造，文化・社会的な背景など内容的な質問。

パラフレーズ：語句を分かりやすく表現させる。

既出事項の確認：既出事項と未出事項との関連を理解させる。

### 4. 暗唱

特に，上級レベルの学生は殆どやりたがらない。

### 5. 口頭作文

#### 6. まとめ

#### 7. 作品の感想文

#### 8. 授業に対する感想文

#### 9. テスト

## 6. テストと評価

さて，テストを実施する場合，資料の持込みが，不可能の場合と，可能な場合がある。また，持込み可能な場合でも，色々な条件を考えることができる。例えば，テキスト，ノートは持込み可能，辞書は持込み不可能といった場合も考えられる。その場合を以下に見てみよう。

### 1) テスト

(1) 内容に即した作文：語句を用意してそれを使用する。繋併せて一文を作る。

(2) 漢字の読み方。

(3) 語句を使用した単文作り。

(4) 内容に関する質問，あるいは一区切りの要約（一パラグラフ，一文の要約）。

(5) 指示代名詞などの指すもの，具体的に何を指しているか。

(6) 作品に出てくる方言を標準語に直す。

あるいは女性的表現と男性的表現を指摘させる。

(7) 作品の感想

(8) 授業の感想

## 2) 結果の分析

以上のテスト（作業）から得られる結果と分析は次のようになる（上記1）の番号にそれぞれ対応）。

- (1) ① 多くの学生は、内容を憶えていない。  
② その場で、本文をもう一度読み直さなければならないので、時間がかかる。  
③ 平易な文章になる。  
④ 非常に優れた文章を書く者もいる。  
⑤ 文章、内容とも優れている。  
⑥ 文章は優れているが、内容に誤りがある。  
⑦ 文章は誤りが多いが、内容は正しい。  
⑧ 文章、内容とも正しくない。
- (2) ① 特に、中国、韓国の学生（実力のあるものでも）に清音と濁音の間違いがある。  
② 促音や拗音の間違い。  
③ 授業で読んだり解説したりしたところなので、ノートを取ったり、テキストに書き込みをしている者は、ほとんど正解である。が、前にも述べたが、実力のある中国人や韓国人は、あまりノートや書き込みをしていないことが多い。
- (3) ① 筋に即して理解していないので、解答（作文）に苦勞の跡がみられる。  
② 原文を少し変えただけのものも見られる。
- (4) ① 内容を忘れている。  
② 授業の時に、充分理解できていなかった。  
③ テストの時点で、充分理解できない。  
④ 授業の後の復習をもっとしていてくれるとよい。
- (5) ① 授業で説明したものであるが、忘れている。  
② 授業の時に、充分理解できていなかった。  
③ テストの時点で、充分理解できない。
- (6) ① 授業で解説しているので、ノートか書き込みをしていれば、問題無いはずであるが、解答の結果はあまり良くない。  
② 授業中よく聞いていて理解している学生は、正答している。
- (7) ① 内容に対しておもしろいと思った学生。興味を感じた者。  
② おもしろくないと思った者。  
③ 興味すら感じなかった者などとかなり差が見られる。

- ④ 具体的にどこに興味を持ったか、どこがおもしろくないかを指摘する学生は、大体まじめで学習態度も積極的である。
- ⑤ 学生の作文能力をみるのにもよい。
- (8) ① 明らかに教師に気兼ねしている文面も見られるが、良かった点を指摘する者も少なくない。
- ② 教材・教育法に関して、非常にきびしい批判をする者もいる。
- ③ 授業が気に入らなかった学生の中には、授業に出席しなくなる者も少なくない。
- ④ 時間の使い方に対する批判もある。
- ⑤ クラス内の実力差が問題にされる場合もある。
- ⑥ 授業では作文は練習していなかったと不平を述べる者もいる。(授業中には、口頭で文章作成の練習はしている。)

## 7. おわりに

以上のように、現在行われている「読む」教育の中で見られる問題点を中心に述べてみたが、もちろん、若干触れたように、良い点も少なくないのである。確かに、「読む」指導法の新しい開発は遅れているかも知れないが、旧式でも「読む」練習をもっと多くすることも重要である。

以前にも述べたことがあるが、日本語の上級クラスに出席している学生の中に、比較的流暢ではあるがかなり文法的な誤りが耳に引っかかるような日本語を喋る学生がいた。クラスでテキストを音読させると、上手だとは言えない。音読も下手であるし、内容理解も十分にはできていない。彼の習得していた日本語は、社会的な背景が分かりそうな、片言日本語の繋袷であった。ややもすると、ヨーロッパの街角で、いかがわしい男達が使用している片言の日本語に似ているという印象さえ与えた。彼は、日本に既に数年滞在していた。このような擦れた片言の日本語が、教室で使用されているのを黙って見逃すわけにはいかない。また、彼が、そんな日本語を、どこかの会社で使用したりすれば、大きな問題になるであろう。

また、日本語学習経験一年位の者が「教室で習った日本語は役に立たない」と言う声も、時々聞かれるが、町の中で前者のように自由に会話ができなくても、正しい日本語を使うことを知っていなければならない。そうすれば、そのうち、十分に意志疎通ができるようになる。心がけて欲しい点である。

あるいは、中国や韓国から来ている留学生は、敬語をよく使う。必ずしも流暢ではなく少しおかしい日本語で、丁寧過ぎて、場違いの感じがすることもあるかも知

れないが、彼らの社会的背景と努力が感じられ、多くの場合、それなりに評価されるであろう。

というようなことを考えてみると、やはり、教室では、できるだけ正しい日本語を学習することが、一番大切である。教室は、それができ、それをしなくてはならない所である。そのために、教室は、上級レベルにある日本語学習者に対しても、正しい良い日本語に触れる機会をできるだけ多く与えなければならない。その一つが「読み」教材の提供である。

ところで、駒井、1990では、「誰が、何時、何処で、誰に、どのような条件下で教えても、最も効果的な外国語教材や教授法は、残念ながら存在しない。教師は、色々な学習条件を考慮した上で、その条件下では一番効果的であろうと思われる教材・教授法を選択・採用し、授業を行う。(中略)教師は、押し付けられた条件に合わせて、理論の修正や妥協を強いられるのであるが、この点において上級クラスも例外ではない。」と述べられているが、広島大学の日本語教育の場合でも、学習者の日本語能力差や興味を持っている分野の違いや日本語学習の動機など、教材や教授法を考える場合、非常に多様な条件を考慮しなければならない。

「読む」教育に関しても、教育する側にも教育される側にも良い条件が整うことが望まれる昨今である。

## 参考文献

- 石田敏子、『日本語教授法』、大修館書店、1988  
大槻和夫、「ドイツ民主共和国の国語教育（17）－言語教育改革の事例－」、  
『教育学研究紀要』 第二部 第33巻、中国四国教育学会、1987  
駒井明、「上級の日本語教育」、『日本語教育』 71号、日本語教育学会、1990  
高見澤孟、『新しい外国語教授法と日本語教育』、アルク、1989  
田中望、『日本語教育の方法－コース・デザインの実際－』、大修館書店、1988  
日本語教育学会、「特集 上級の日本語教育」、『日本語教育』 71号、  
日本語教育学会、1990